

4.

特別招聘教授 プロジェクト

2019 年度特別招聘教授
プロジェクト概要

ジャン・バーズレイ特別招聘教授
プロジェクト

▶ 2019 年度 特別招聘教授プロジェクト概要

領域・文化横断的なジェンダー研究の知見の共有

「特別招聘教授プロジェクト」の主な目的は、グローバルな視野から本学のジェンダーに関する教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。海外の著名な研究者を招聘し、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたセミナー等での講義による国際レベルのジェンダー研究教育プログラムの実施に貢献していただき「国際的研究拠点」としての研究所の総合力を向上させる重要な事業である。2019 年度は、**ジャン・バーズレイ氏**（ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授）を招聘した。

近代以降の日本の女性表象研究を専門とする**バーズレイ氏**は、舞妓表象と冷戦初期の女性表象についての研究プロジェクトを進めてくださり、招聘教授としての滞在期間にデータ収集を実施して、本研究に関する著書の多くの部分を執筆された。国際シンポジウム「The Philosopher & the Princess（哲学者と皇太子妃）——冷戦期日本における自由と愛と民主主義」（本報告書 47 頁参照）では、1950～60 年代の経済成長期の女性の教育機会の拡大、女性雑誌の隆盛と中流意識の浸透は女性たちにどのような選択肢をもたらしたのかをテーマにした企画をしていただいた。文学、ジェンダー、社会科学という様々な分野の参加者にとって大変興味深いシンポジウムになったと思う。他にも大学院の講義を担当していただき、本学の院生に対して、熱心な指導をしていただいた。大変フレンドリーなバーズレイ氏の講義は常に履修生を魅了する内容となったばかりか、講義以外の時間にも院生の英語論文指導をしていただくなど、本学の院生教育へ多大な貢献をしていただいた。

2019 年度の特別招聘教授プロジェクトにより、特に、ジェンダー研究の学際的な要素を引き出していただき、ジェンダー研究の学問的意義についても再確認する機会をいただいた。本研究所の研究成果はこれまで主に社会科学的なものに傾倒していたが、バーズレイ氏の領域横断的な研究からは、ジェンダー研究の多様性が示され、今後、本研究所が目指す事業への新しい方向性も提示していただいたと考えている。

■ ジャン・バーズレイ 特別招聘教授プロジェクト

【ジャン・バーズレイ 特別招聘教授プロフィール】



ノースカロライナ大学チャペルヒル校アジア研究科アジア学教授（日本史）。カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士（東アジア言語と文化）。研究分野は日本の女性像とその表象である。『冷戦期日本の女性とデモクラシー』（ブルームスベリー学術出版、2014 年、英語）をはじめ、著書多数。『日本の「青鞥」：1911 年から 1916 年までの「青鞥」の新しい女のエッセイとフィクション』（ミシガン大学日本研究センター、2007 年、英語）では、2011 年の平塚らいてふ賞（日本女子大学）を受賞。また、ドキュメンタリー映画 2 本の作成にも携わるなど、広範かつ大変優れた研究実績を有している。また、アジア研究学会（南東部）の会長を務め、多くの学術誌編集に編集長や論文審査員として携わるなど、学術界への貢献度も高い。

【業績および期待されるプロジェクト成果】

ジャン・バーズレイ博士の専門領域は日本学研究で、これまで日本の近現代の文化、社会、女性に焦点を当てた研究を展開し、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近年の日本における女性の表象に関する著書と論文では、日本学研究者のみならず、ジェンダー研究者や社会学者からも、日本社会における女性の活躍についての理解を深めることにつながったという高い評価を得ている。バーズレイ氏は日韓米における研究ネットワークも確立しており、本学においてジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが可能である。また、バーズレイ氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものである。バーズレイ氏には 2017 年にジェンダー研究所が主催した国際シンポジウムにおいて基調講演者として登壇していただいた。このシンポジウムに参加した学生・院生及び学内外の研究者に好評を博した講演であったことから、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

【採用期間】 2018 年 8 月 2 日～2019 年 7 月 31 日

【職務内容およびその支援】

バーズレイ特別招聘教授に依頼した業務は、下記の 5 項目。ジェンダー研究所スタッフが事務業務支援を担当。2019 年 4～7 月には本学博士後期課程生、木原遥がリサーチ・アシスタントを務めた。

- 1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進
- 2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加
- 3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告
- 4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援
- 5) 上記活動についての成果報告

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクトの実施：書籍刊行プロジェクト 2 件

①舞妓表象研究『Maiko: Imagining Geisha Girlhood in Japan』 カリフォルニア大学出版（近刊予定）

- ・研究者間のレビューから戻された原稿をコメントに基づき改訂した。
- ・掲載予定画像の著作権取得の手続きをリサーチ・アシスタントと共に行った。

②50 年代冷戦期の女性表象『Democracy's Poster Girls: Beauty Queens and Fashion Models in Cold War Japan』

- ・1950 年代の雑誌・新聞記事を調査しての資料収集をリサーチ・アシスタントと共に行った。
- ・本プロジェクト調査に基づくセミナーを 2019 年 7 月 10 日に開催（本学院生、研究者対象）

2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇

■国際シンポジウム「哲学者と皇太子妃：冷戦期日本における自由と愛と民主主義」(2019 年 5 月 19 日)



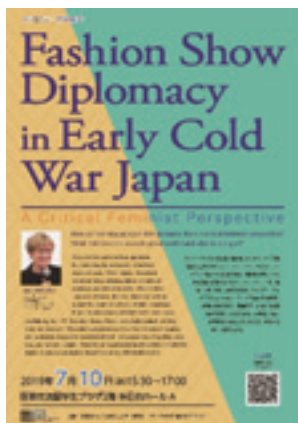
1950～60 年代の日本における、フランス人フェミニスト哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールと美智子皇太子妃の社会的影響力に焦点を当てる内容。エモリー大学のジュリア・ブロック准教授を基調講演者に、津田塾大学の北村文講師と早稲田大学のゲイ・ローリー教授をディスカッサントに迎えて、IGS の大橋史恵が司会を務め、バーズレイ氏も研究報告を行った。女性の多様性や、戦後および冷戦という社会文化的背景がどのように若い女性たちの夢や希望に作用したかを再考し、現代社会における女性たちについて見つめなおすことを促す内容であった。



[参照:本報告書 47～49 頁]

3) 大学院生対象の英語によるセミナー講師

■IGS セミナー「冷戦初期の日本におけるファッションショー外交：フェミニスト視点からの批判的考察」(2019 年 7 月 10 日)



アメリカが主導する冷戦期の西側イデオロギーの推進政策は、政治の領域に留まらず、一見無関係に思われるファッションなど、生活の隅々にまで至る営みに組み込まれていたことを鋭く指摘する講義内容。冷戦初期という近代史をジェンダー視点から分析する、先駆的な研究成果の報告であり、ファッションの研究に取り組む学生たちの参加を得て、質疑応答での議論は現代のグローバルな状況についても含めて幅広く展開された。



[参照:本報告書 56～57 頁]

4) 大学院講義

■博士前期課程対象「The Modern Girl in Japan: Film Fashion, Labor and Sports」(2019 年度前期)



2019 年度前期の、博士前期課程共通科目「男女共同参画国際演習 I」[19S0259]を担当。1920～30 年代の日本のモダンガールについて、ファッション、仕事、映画、文学作品、娯楽やスポーツなどの多様な表象から分析する内容。演習を中心にした英語による講義。履修生 2 名、聴講生 1 名を含む 7 名の学生が出席した。今期は学生の英語スキルのレベルが揃い、学生同士の英語による討論も活発に行われた。前学期同様、熱心な学生たちの参加を得て、教えることが楽しい講義であったとのことである。

[参照:本報告書 123 頁]

5) その他の貢献

① 国際シンポジウム「踊る中国：都市空間における身体とジェンダー」コメント (2019 年 6 月 22 日)



19 世紀末以降の中国における女性の身体活動の変化に焦点を当てるシンポジウムでコメンテーターを務めた。3 件の研究報告で示された中国における経験を、歴史研究、近代的な身体、女性のセクシュアリティなどの視点から、アメリカにおける経験との関連性を解説した。シンポジウムの主要言語は日本語と中国語であったが、企画担当者である大橋史恵准教授とリサーチ・アシスタントの木原遥博士後期課程生のサポートにより、円滑なコミュニケーションを図ることができた。また、中国をフィールドに女性の表象研究に取り組む研究者との、ネットワーキングの機会にもなった。

[参照:本報告書 53～55 頁]

② 『ジェンダー研究』編集委員 (第 22 号、2019 年 7 月 31 日発行)



IGS が刊行する『ジェンダー研究』編集委員会に第 22 号編集から参加。書評用の書籍の選定や評者の紹介、英文校閲、さらに査読者の紹介など、編集に大きく貢献した。23 号以降も、学外委員として編集委員を務める。

[参照:本報告書 128～131 頁]

③ INTPART プロジェクト事業への関与：学術英語の教授

2019年に開始した INTPART プロジェクト [本報告書 114～117 頁参照] の一環である、大学院生のノルウェー派遣実施にあたり、英語スキル向上のためのレッスンを担当した。具体的な教授内容は、自身の研究内容について口頭で簡潔に説明する技術、調査訪問を希望する先への依頼状や礼状の書き方、インタビューの準備方法など多岐に渡る。また、次年度以降もこれに倣って INTPART メンバーが言語面での準備について学生に教授できるよう、一連のレッスン内容についての報告書を作成提出している。

【プロジェクト成果】

2019年度のジャン・バーズレイ氏の本研究所への貢献は、前年度に引き続き、多岐に渡った。前記の各項目の活動に限らず、ジェンダー研究所やリーダーシップ研究所が企画するシンポジウムやセミナーにも積極的に参加するなど、グローバル女性リーダー育成研究機構の事業活動に深く関与した。所属の研究者やスタッフともよくコミュニケーションをとり、協調性や協働意欲が高く、その仕事ぶりは研究所所属の研究者にも大きな刺激となった。

中でも顕著なのは、教育面での成果であろう。博士前期課程の科目授業においては、ひとりひとりの達成度に気を配りながら教室での講義をするのみでなく、必要に応じて学位論文執筆に向けた個別指導も行った。また、専門分野の指導のみならず、海外へ調査研究に出かける学生の準備の支援なども進んで引き受け、学ぶ意欲のある者に積極的に手を差し伸べる姿勢からは、学生、所員ともに、学ぶところが多くあった。

国際シンポジウムにおいては、「戦後・冷戦期の女性」という現代史についての報告を起点に、21世紀社会のジェンダー状況をどのように読み解くかが検討された。社会人の参加者も多く、質疑応答での発言も活発にあり、生涯学習の場としての教育成果をあげるものでもあったといえる。そうした企画内容の価値もさることながら、シンポジウム当日、バーズレイ氏が、開始前の時間に聴衆の間を歩き、ひとりひとりに声を掛ける姿が印象的であった。このような交流が、聴衆をシンポジウム内での議論に惹き込む要素となっていることは間違いない。大学という場での学びは、一方的な知識の伝達ではなく、ひととひとの相互な知的交流により成るということを、改めて確認する場面であった。

研究については、表象研究および近現代史という人文科学分野のテーマが加わったことで、研究プロジェクトの多様性を向上させる成果があった。この点は、大学院講義、国際シンポジウム、セミナーにも反映され、結果として、社会科学系、人文科学系という異なる分野のジェンダー研究者間の研究交流の機会も作り出した。そうした分野間交流は、本学におけるジェンダー研究の質の向上につながるものである。

合わせて特記したいのは、一緒に来日した夫のフィル・バーズレイ氏による本学事業への貢献である。フィル氏のボランティアにより開催された、外国語教育センターでの英語カフェは、参加した学生たちにも好評であった。フィル氏のボランティアの申し出を快く引き受けてくださった、外国語教育センターの清水徹郎センター長、造力由美アソシエイトフェローに、この場を借りて感謝申し上げたい。

以上のとおり、本特別招聘教授プロジェクトは、本学におけるジェンダー研究に、研究、教育の両面で活性化をもたらす大きな成果をもたらすものであったといえる。